

石垣整備工事に伴う発掘調査 出石城山里曲輪の石垣構造が判明

慶長9年(1604年)、小出吉英により有子山のふもとに築かれた出石城。崩落の危険性があった山里曲輪の石垣の解体工事と発掘調査を、昨年11月から行ってきました。今回の解体で、危険となっていた石垣の石材の抜け落ちや、石垣が外側にせり出す「孕みだし」の要因が、土砂が石垣の裏側に流入したことや、石材のひび割れなどによるものと分かりました。



▲発掘調査で出土した瓦など



▲元の位置に一つずつ積み直す石垣

たことや、石垣を固い地盤に乗せるために、元々の地面を削る「地形根切り」の工法を取っていたことなどが確認され、江戸時代における但馬の城づくりを考える上で、重要な成果となりました。また、瓦や釘なども出土しており、この場所に瓦ぶきの木造家屋があったことも推測されます。

現在、文化財として未永く保存するために、解体時の成果を生かした修理を行うとともに、当初の状態に戻すための積み直しを行っています。

新しい地域コミュニティ市民協働研修

「地域を変える女性のチカラ」開催

6月20日、豊岡市民プラザで、新しい地域コミュニティ市民協働研修「地域を変える女性のチカラ」を開催しました。講師は、NPO法人吉備野工房ちみち理事長の加藤せい子さん。講演で「自分たちの住みやすい未来は、自分たちで創っていけるということを知り、信じ、行動していくことが大切」なものでないものねだりではなく、あるもので十分に

地域づくりを行える」と話しました。本市は、女性や若者が活躍する協働のまちづくりを推進します。



▲ワークショップで地域課題の解決方法を検討する参加者

新しいプールで初泳ぎ

静修小学校でプール竣工式

6月20日、静修小学校でプールの竣工式を行いました。新しいプールは、繊維強化プラスチック(FRP)製で、メインプールと低学年用のサブプールがあります。以前のコンクリート製プールが老朽化していたため、昨年8月から改修工事を進めてきました。

晴天に恵まれた当日は、竣工式の後、プール開きとなり全校生が、ピカピカのプールで初泳ぎを楽しみました。



▲“初泳ぎ!!” いざ出発

主な市政の動き

〔6月〕

11日・2015「植村直己冒険賞」授賞式・記念講演会
・2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会ホストタウン(モングル国)登録

16日・豊岡市環境審議会
19日・第36回兵庫神鍋高原マラソン全国大会

20日・静修小学校プール竣工式

・新しい地域コミュニティ市民協働研修

17日・市長の特別授業(日高高校、22日・出石高校、7月11日・豊岡高校)

27日・豊岡市地域公共交通会議

〔7月〕

5日・熊本県益城町の家屋被害調査に職員派遣(13日)

6日・豊岡市基本構想審議会

「コウノトリ子育て支援メッセージ」夢へのチャレンジ

第2回豊岡市少年野球教室開催

6月26日、豊岡総合スポーツセンター「こうのとりのりスタジアム」で、NOMOBベースボールクラブの選手らを講師に招き、第2回豊岡市少年野球教室を開催しました。

野茂英雄さんも指導に加わった今回の野球教室は、市内の少年野球チームに所属する7チーム95人の選手が参加。野茂代表は「分からないことは、何でも聞いてください」とあいさつしました。

市長がまちづくりについて直接語る

市内の高校で市長の特別授業「豊岡の挑戦」開始

6月17日から、市内の高校で、市長が、生徒に市のまちづくりについて直接語る「市長の特別授業」を開催しています。この授業は、生徒が豊岡の魅力を再認識し、豊岡の将来に希望を見出し、豊岡に定住したいという意識を醸成するために、全ての高校で開催されます。

7月11日には、豊岡高校の全校生が授業を受け、市長は

子どもたちは、3グループに分かれて元気よくウォーミングアップ。その後キャッチボールや守備、走塁、打撃などの指導を受けました。打撃指導では、NOMOBベースボールクラブの選手が見本を見せると「飛距離すげー」「打球のスピードが速い」などの歓声を上げ、見入っていました。参加した子どもたちの中から、プロ野球選手が誕生することを期待します。

「豊岡の挑戦」と題し、人口規模は小さくても世界の人々に尊敬され、尊重されるまち「小さな世界都市」Local & Global City」の実現に向けた取り組みなどを説明しました。講演終了後、生徒と市長は、パネルディスカッションを行い、中心市街地への企業誘致や高齢者が住みやすいまちづくりなどについて話し合いました。



▲生徒と市長のパネルディスカッション(豊岡高校)



▲野茂さんから直接指導を受ける選手

中貝市長の徒然日記 ⑩

トウモロコシ風に吹かれて

いつの頃からか、トウモロコシを作るようになりました。農業の知識は何もありません。サツマイモはいつの間にか消えてなくなり、オクラもアスパラも、知らぬ間に草葉の陰に消えていきます。が、川沿いの畑で、不思議とトウモロコシだけはよくできました。

一度、県の農業改良普及センターの所長に自慢をしたら「あ、イネ科の植物は馬鹿でもできますな」と一喝され、自身に対する尊敬の気持ちがない、たいそう傷ついたこともあり、この話を種屋さんに話したところ、よほど印象的だったのか、今でもトウモロコシの種を買いに行くと「あ、イネ科ですな」と言われる始末です。

種まきは、たいてい5月の連休です。下宮銀座と呼ばれる村のど真ん中、一等地で草だらけの畑をこぎれいにし、うねをたてて種をまいていると、近所の古老が「おっ、市長が種をまきなつたで。よっ

しゃ、ワシもそろそろまく時期だな」と、まるで村の歳時記になった感があります。

出勤前、背広を着たまま水をやると、変と言えは変ですが「うーん、ムネちゃん、こりゃ、肥料をほしがつてる顔をしているな」と別の古老が声を掛けたりしてくれます。ムネちゃんというのは、宗治の愛称です。ほくの村は、早くから欧米化が進んでいるので、基本的に村人は皆、年齢差に関係なくファーストネームで互いを呼び合います。

と、自慢のトウモロコシでしたが、ここ数年、さすがに連作障害が出たのか、出来があまり良くありませんでした。孫たちの期待を裏切る夏が続いていました。そこで今年は、マニュアルに従い、施肥もすっかり行いました。

過日、母が他界しました。夕暮れ時、自宅から亡きながら連れて通夜の会場に向かいました。家を出ると、すぐに畑があります。昔、母が作り方を教えてくれたトウモロコシが、今年は過去最高の出来で、青々と風にそよいでいました。